

『英語ノート』を用いた小学校外国語活動のための授業実践

平松貴美子¹・伊東 英²

1. はじめに

2008年に告示された新学習指導要領に基づき、全国の公立小学校で5・6年生を対象にした外国語活動が2011年度から必修化されることとなった。その伏線となったのは2000年度から開始された「総合的な学習の時間」である。この授業時間の中で国際理解教育の一環としての英語（外国語）活動が全国の9割以上の小学校で実施されているという事実がある。ただし、その活動内容や授業頻度には大きな開きがあることも否めない。そのため文部科学省が「総合的な学習の時間」と外国語活動とを分離し、後者の授業内容の充実を図ったものと考えられる。

「総合的な学習の時間」は、元来各学校が地域や児童の実態に合わせて、特色ある教育活動を展開できる授業であり、情報、福祉、国際理解教育など従来の教科の中では教えきれない現代社会の課題に対応できる「生きる力」を育むようにと設定された時間であった。

しかし、学校裁量や学年裁量の時間が増え、学習のねらいや目標、指導内容や方法が、学校・地域によって、また教員の指導力によってさまざまになり、学校・地域間格差が顕著になり始めるとともに、教員（指導者）が授業準備のために時間を確保することが大きな課題となってきた。

小学校における従来の英語活動に限って言えば、総合的な学習の時間内の国際理解教育という大きな概念の中で、その一環としての扱いであったため、それぞれの小学校教員の捉え方は多様であり、児童に対する指導内容についてもその方法についても、各人の経験や知識、あるいは英語運用能力等に頼ったものになっていた。そうした授業形態の具体的な例として、地域に在住の外国人ゲストを招いて生徒たちとの交流を図る、いわゆるワン・ショットと呼ばれる授業、民間の英会話講師が「英会話」を指導している授業、小学校専用に雇用した英語を母語とするネイティブ・スピーカーに全面的に任せてしまう授業等、実にさまざまな授業形態が存在している。極端な例を挙げれば、中学校英語をそのまま小学校に降ろしてきたような授業を行っていた小学校も見受けられる。

こうした現状を小学校英語教育の黎明期における問題と捉えれば、2008年に告示された新学習指導要領が小学校における外国語活動の目標を初めて明確化したことは、これまでの約10年にわたる学校現場の混乱を少しでも解決していくための良策と考えられるのではないだろうか。

岐阜大学教育学部においては、現時点で小学校外国語活動に対応した授業科目は2年次後学期開講の「児童英語教育」と3年次前学期開講の「小学校国際理解・英語活動」の2科目が用意されている。これらの授業科目は学校教員養成課程生涯教育講座ならびに生涯教育課程の専門科目として開講されている。本実践報告は2009年度前学期開講の「小学校国際理解・英語活動」に関するものである。

2. 外国語活動の目標と内容

新しい『小学校学習指導要領』の第4章「外国語活動」によると、小学校における外国語活動の目標と内容は次のとおりである。

第1 目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

第2 内容

1. 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指

1 教育学部非常勤講師 2 学校教育講座

導する。

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
 - (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
 - (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切を知ること。
2. 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。
- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
 - (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
 - (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

3. 『英語ノート』について

新学習指導要領に基づいて5・6年生で外国語活動を年間35時間実施する上で、道しるべとなる教材として文部科学省は児童用の『英語ノート1』(5年生用)、『英語ノート2』(6年生用)、これらの指導法や指導計画表ならびに活用方法の解説をした『指導資料』(マニュアル)、音声教材CDとデジタル教材を作成した。『英語ノート』はそれぞれ9つのLessonで出来ており、1つのLessonは平均して4回の授業で構成されている。『英語ノート』は教科書ではなく、あくまでも副教材なので使用しなければならない強制力はないが、外国語を指導した経験の少ない教員にとっては、その内容が学習指導要領や学校現場のスケジュールに沿っており、指導の拠り所となっている。『英語ノート』の内容は以下の通りである。

『英語ノート1』

- Lesson 1 世界のこんにちはを知ろう
- Lesson 2 ジェスチャーをしよう
- Lesson 3 数で遊ぼう
- Lesson 4 自己紹介をしよう
- Lesson 5 いろいろな国の衣裳を知ろう
- Lesson 6 外来語を知ろう
- Lesson 7 クイズ大会をしよう
- Lesson 8 時間割を作ろう
- Lesson 9 ランチメニューを作ろう

『英語ノート2』

- Lesson 1 アルファベットで遊ぼう
- Lesson 2 いろいろな文字があることを知ろう
- Lesson 3 カレンダーを作ろう
- Lesson 4 できることを紹介しよう
- Lesson 5 道案内をしよう
- Lesson 6 行ってみたい国を紹介しよう
- Lesson 7 自分の一日を紹介しよう
- Lesson 8 オリジナル劇を創ろう
- Lesson 9 将来の夢を紹介しよう

図1 『英語ノート1』表紙



図2 『英語ノート2』表紙



4. 授業内容の選択

2009年8月に実施された岐阜県教育委員会教員採用試験の第2次試験の面接において、小学校教員

志願者に対して、外国語活動の授業の準備として外国人指導助手との打ち合わせを英語で行うという内容がすでに盛り込まれた。

また、教育実習中に実習校の配属クラスの担任から英語活動をやるように依頼されたという学生からの現状報告を数年前から頻繁に耳にするようになった。小学校現場では、新しく導入される外国語活動の授業実践についてじっくり取り組む研究環境を設定し授業研究会を開催することが難しいこと、英語を得意とする教員ばかりが実習指導教員ではないというような理由から、特別な指導を受けないままに教育実習生に外国語活動の実践の場が提供されることが少なくない。

このような状況に対応するために、2009年度前学期3年次の「小学校国際理解・英語活動」の授業においては、従来の授業内容に若干の修正を加えて、英語活動の指導技術を理論だけではなく、効果的な指導方法を教授し、指導内容や指導方法を熟知した実践者として授業内で指導体験をさせてから、教育実習現場に赴かせるべきであると考えた。（岐阜大学教育学部では小学校教育実習は3年次後学期に実施される。）結果的にこのような授業内容は、岐阜県の教員採用試験対策の一環としても有効であると思われる。

図3 授業風景



5. 授業の目的

授業の目的は以下の5点とした。

- (1) 小学校での外国語活動が目指すものを、『英語ノート』の実践と活動を通して概観する。
- (2) すでに全国で導入が始まっている外国語活動の副教材『英語ノート』と『指導資料』を使って模擬授業を行うことにより、指導内容を理解する。
- (3) 模擬授業を行うことにより、効果的な指導技術を理解する。
- (4) ティーム・ティーチングの形態を経験することで担任（HRT）の役割と外国人指導助手（ALT）または外国語を話者者（VET）の役割や課題を体感する。
- (5) 実際の指導に必要な英語力を知り、教員採用試験に向けて準備をする。

6. 受講者

受講者は岐阜大学教育学部の学生29名である。

図4 受講者の内訳

学 年	講座等	人数
4年生	生涯教育	2
	英語教育	1
3年生	生涯教育	5
	英語教育	13
	美術教育	3
	学校教育	2
	特別支援	1
	技術教育	1
	聴講生	1
合計		29名

7. 実践の流れ

7.1. 模擬授業形態の決定

受講生29名を5チームに分けた。このチームメンバーについては専門教科の偏りがないような配慮

をしながら、筆者（平松）が決定した。

まず、それぞれのチームがひとつのLessonを『英語ノート1』の中から摘出し、担任役をT1とし、英語を話す指導助手役をT2として、各Lesson内の4時限分の模擬授業担当者を決定した。また、T1とT2が担当する箇所や役割も話し合いにより決めさせた。

図5 授業形態（チーム内の個人の役割分担）

授業担当者	役割		
A	1時限目 T1		
B	2時限目 T1		
C	3時限目 T1		
D	4時限目 T1		
E	1時限目 T2	2時限目 T2	
F	3時限目 T2	4時限目 T2	

『英語ノート』のひとつのLessonが4時限から成立しているため、ひとつのチームで選択したLessonの始めから終わりまでを責任を持って児童役である被授業者に提示するために上記のようなティーム・ティーチングの形態を取った。

授業担当者役でない学生は全員児童役となった。各1時限の授業が終わるごとに、「授業レポート」の提出を求めた。このレポートを記入する際には必ず授業内容と指導技術を含むこととし、評価できる点と改善すべき課題を見つける視点を持ちながら積極的に授業に参加することが求められた。

7.2. 準備

学生に事前に配布した資料は以下の2点である。

- (1) 文部科学省刊『英語ノート1』
- (2) 『英語ノート1 指導資料』の担当するLesson資料

学生たちは、実質的には指導マニュアルに該当する『英語ノート1 指導資料』にある解説や授業案、指導のためのクラスルーム・イングリッシュ等を熟読し、必要な教材は作成するなど事前準備をすることが求められた。

また、授業の場面ごとでのティーム・ティーチングの役割分担と、授業方法を相談し、事前練習を行うことも求められた。

7.3. 模擬授業の手順

- (1) 小学校では通常45分授業であるが、本授業においては、主に児童に活動させる時間を短縮することによってひとコマを30分から35分程度に短縮させながらも、原則的には『英語ノート』の『指導資料』に掲載されている指導案に沿った形で授業を行った。大学の90分授業で毎回2時限分の模擬授業を行うことにした。
- (2) 1時限目を終えると、授業担当者役の学生から「苦労したこと」「迷ったこと」「悩んだこと」など短い時間で一言コメントをさせ、児童役の学生たちと共有した。
- (3) その模擬授業について「良かった点」、「改善が図れると考えられる点」を自由記述式で書かせ「授業レポート」として提出させた。
- (4) 筆者（平松）から指導ポイントを挙げ、後半はまた同様に2時限目の授業とした。

8. 結果と考察

日本の小学校教育開始以来初めて導入される「外国語活動」は、教科としての言語教育の扱いでは

なく「活動」として必修化となることを踏まえておかななくてはならない。指導内容が「活動」に基本を置く限り、副教材『英語ノート』の指導法に関する大学での授業は、担当者（平松）が一方的に授業をする性質のものではなく、「外国語活動」の本質を成している「コミュニケーション活動」とは何かという点に関して、クラス全体で体験し、評価し、そして再考するというプロセスを経ていくのが相応しいと判断した。

そこで今回の授業実践の統括として、受講生が大学の授業の中で行った1時限ごとの模擬授業実践の後に、『英語ノート』に関して学生たちが書いた自由記述形式の「授業レポート」を元にしながら振り返ることとする。あるアクティビティについて「できた」、「できなかった」といった答えよりも、1時限ごとの模擬授業で各自が感じたことや学んだことが明らかにされるほうが、今回の授業実践に関してより適切な考察ができると考えられる。

8.1. 第1の目的に関する結果と考察

第1の目的は、「小学校での外国語活動が目指すものを『英語ノート』の実践と活動を通して概観する」であった。

5つのチームが『英語ノート1』から選択したLessonは以下のとおりであった。

- ①Lesson 4 自己紹介をしよう
- ②Lesson 5 いろいろな国の衣裳を知ろう
- ③Lesson 6 外来語を知ろう
- ④Lesson 7 クイズ大会をしよう
- ⑤Lesson 8 時間割を作ろう

学生一人当たりの模擬授業体験回数は、担任役の場合は1回、外国人指導助手役の場合は2回であった。児童役については18～19回体験することとなった。また、模擬授業の進め方に関しては、受講者のほぼ全員が『指導資料』に掲載されている詳細な授業計画に沿って授業を行った。

受講生は児童役として十分な回数を体験することができたので、「外国語活動」という授業の流れや活動の時間配分はもとより、『英語ノート』が示している「コミュニケーション活動」における実際の活動内容を知り、その概要を理解したと言える。

前学期にこの授業を履修し、後学期に小学校教育実習を終えた3年生に、「外国語活動」を実際に経験した感想を聞いたところ以下のような意見が聞かれた。

- ・授業で授業の目指すところが「コミュニケーション活動」だとわかっていたので、迷わず実際に指導できた。
- ・Lesson内のアクティビティをすでに体験していたので、児童の視点に立って運営することができた。
- ・授業の実践で作った教材があったので、実際の実習でもすぐに役に立った。
- ・学校の先生方はまだ指導方法について確立されていなかったようだが、私がやって見せたことで現場の先生方に参考になったと言われた。
- ・この授業が予行演習になって役に立った。
 - ・自信を持って教壇に立つことができた。

実際の現場でも指導方法や『英語ノート』の使い方についてはまだ手探りの状態であるため、大学において模擬授業経験のある学生による授業は、各学校において一種のモデルを示すことになった場合もあったと考えられる。

8.2. 第2の目的に関する結果と考察

第2の目的は、「実際に模擬授業を行うことにより、指導内容を理解する」であった。

指導内容については、單元ごとに設定されており、ここでは「Lesson 4 自己紹介をしよう」の例を『英語ノート1 指導資料』p. 55より抜粋する。

1. 主としてコミュニケーションに関すること
 - ・自分の好きなものを含めて自己紹介すること。
 - ・積極的に英語で好き嫌いを尋ねたり、答えたりすること。
 - ・好き嫌いをはっきり言うことの大切さを知ること。
2. 主として文化に関すること
 - ・単語の発音の違いに気付き、英語の音声に慣れ親しむこと。
 - ・自己紹介の発表をする際のジェスチャーの違いを知ること。
 - ・ALTの好き嫌いを尋ね合う中で文化の違いに対する理解を深めること。
 - 話題：自分の好きなものを含めて自己紹介をする。
 - 場面：自己紹介をする。好みを伝える。
 - 表現：Do you like apples? Yes, I do./No, I don't. I like bananas. Thank you.
 - 主な語彙：apple, banana, pineapple, strawberry, bird, cat, dog, rabbit, fish, ice cream, juice, milk, baseball, skiing, soccer, swimming, like, thank, do, not (don't), yes, no
 - 国際理解：単語の発音や身振り手振りの違い。

上に示された内容を機能的につなげていくのが体験活動である。実際の活動は英語に慣れ親しみやすいように、さまざまな手法で組み立てられている。初めはCDを使った 'Let's listen' でリスニングをさせ、'Let's play' では単語を楽しく聞き取るゲームを行う。いずれもインプット重視である。

その後 'Let's chant' では、まず活動内で使用する表現の口頭練習をし、'Activity' では実際にクラスの児童相互で聞いたり答えたりする活動に入る。上級者用として発展的活動のアイデアも盛り込まれていて、飽きさせない考慮がなされている。

最終的に4時限目にはクラスの生徒全員の前で各自が自己紹介スピーチができるようになることを目標としている。

これらの一連の活動を大学の「小学校国際理解・英語活動」の授業実践の中で受講生たちが体験することにより、教育実習に赴いた際に、あるいは将来教員として教壇に立った際に、授業者としての指示の出し方や教材の提示方法、あるいは使用言語について、児童側の受け取り方を分析することにより、ひとつひとつの活動の課題や手法が体験できたと考えられる。

8.3. 第3の目的に関する結果と考察

第3の目的は「実際に模擬授業を行うことにより、効果的な指導技術を理解する」というものであった。

8.3.1. 実践にあたっての指導技術

児童に外国語活動を指導する際に、指導者として身につけておくべき必要な技術とは何か。コミュニケーション能力の素地を養っていくために必要な指導者のノウハウを、各模擬授業の後のフィードバックとして助言した。

それらをまとめると以下のような点が挙げられる。

(1) 指導者としての態度や雰囲気

- ①声の大きさ、明瞭さ、スピード（早すぎず遅すぎず）
- ②立ち位置が適切である

- ③ボディランゲージ（ジェスチャー）を使う
- ④表情—アイコンタクトを大切にする
- ⑤笑顔で堂々としている
- ⑥雰囲気—児童と一緒に活動に参加し、楽しもうとしている・威圧的でない・フレンドリーでサポートタイプである
- ⑦褒める

(2) 活動の導入方法

- ①説明ではなくデモンストレーションで示す
- ②活動内容をわかりやすく提示する
- ③児童の反応を見ながら段階を追ってすすめる
- ④活動のゴールを明確にする
- ⑤活動内容・教材を効果的に活用する
- ⑥「今」「ここ」にいる児童の実態と、授業の内容の関連性を示す
- ⑦児童の興味関心をひきつけるような導入の工夫をする

(3) 活動の工夫

- ①同じ言語材料を飽きずに繰り返す工夫をする
- ②必ず復習を入れる
- ③児童の理解度をスモールステップで確認する
- ④目の前にいる児童をしっかりと観察する
- ⑤活動の難易度を測る
- ⑥オリジナリティを出す工夫をする
- ⑦児童を次第に巻き込むしかけを作る
- ⑧理解を深める視聴覚教材を用意する
- ⑨児童間の助け合いを奨励する
- ⑩できる子を前に出して良い例を示す

(4) その他

- ①事前準備をしっかりと（段取り八分）
- ②チーム・ティーチングの場合の役割分担を明確にする
- ③全体的な授業の流れをスムーズにする配慮をする

以上のような観点から毎回の模擬授業についてフィードバックすることで、一人ひとりが次回の模擬授業に生かすことができ、また、他の学生の模擬授業を客観的に見つめることができるようになった。他人の授業実践を批判的に見ることができるようになるために、授業後に自由記述形式で「授業実践報告」としてレポートを提出させた。内容は児童の立場で授業を受けてみた感想をポジティブに「評価できる」と「課題が残る」と考えられることに分類して書いたものである。

8.3.2. 模擬授業後の指導技術調査

外国語活動のために必要な指導技術に関する調査結果をまとめてみると以下のものであった。各項の後ろに付した（ ）内の記号と数字は、+記号付きの数字は該当項目に対してのポジティブなコメント数、-記号付きの数字はネガティブなコメント数を表す。

(1) 指導者としての態度や雰囲気

- ①声の大きさが適当で明瞭である (+81/-3)
- ②児童と一緒に楽しもうとしている・威圧的でない・フレンドリーで良い雰囲気である (+70/-8)
- ③表情が笑顔で良い(+63/-19)
- ④ジェスチャーを使っている(+54/-27)
- ⑤堂々としている(+48/-9)
- ⑥褒めている(+39/-4)
- ⑦話すスピードがゆっくりで良い(+35/-0)

(2) 活動の導入・提示方法

- ①説明ではなくデモンストレーションで示す (+120/-52)
- ②説明が十分で活動がわかりやすい (+0/-92)
- ③指示言語について 英語でよかった (+88/-0)
- ④英語運用能力が脆弱 (+10/-71)
- ⑤活動前の提示がうまい (+46/-21)
- ⑥活動の導入で児童の興味関心をひきつけるような工夫がある (+44/-23)
- ⑦活動のゴールを明確にしている (+33/-8)

(3) 活動の工夫

- ①児童を次第に巻き込むしかけを作る (+122/-30)
- ②理解を深める視聴覚教材を用意する (+108/-0)
- ③活動の内容の工夫や応用がある (+62/-6)
- ④内容の難易度 (+1/-49)
- ⑤目の前にいる児童をしっかりと観察する (+35/-6)
- ⑥同じ言語材料で繰り返す工夫(チャンツなど含む)をしている (+34/-2)
- ⑦児童の理解度を段階を追って確認する (+30/-6)
- ⑧教材・活動の見せ方の工夫がある (+25/-11)

(4) その他

- ①授業の事前準備 (+39/-19)
- ②授業の全体的な流れ (+25/-27)
- ③異文化理解につながる (+23/-1)
- ④役割分担 (+23/-13)

8.3.3. 指導技術調査の考察

上記の調査結果から考察できることは以下のとおりである。

(1) 指導者としての話し方

児童の前で教壇に立つ場合に大切だと考えられるポイントは伝わっているようである。わかりやすい話し方でポジティブな声かけをする教員、明るい笑顔で児童と一緒に活動を楽しもうとする積極的な教員の姿である。これは外国語活動に限った要素ではなく、どの授業においても当てはまる教員像であろう。

(2) 指示の出し方

説明は、日本語で説明をしてしまえば児童が英語を聞く機会を奪ってしまうことになる。楽しく興味深い活動をするために、どういうルールで、どのような方法で活動するのか、どうなったらゴール

なのか、児童が積極的に英語の指示を聞き、想像力を働かせて推測していくことにこの活動の主な意義が存在している。そのため言葉による「説明」ではなく、「デモンストレーション」で活動をしながらか見せることが大切である。

(3) 説明をしない

英語を得意とする学生は、英語で説明することに終始する傾向が顕著で、デモンストレーションを忘れがちであった。授業中の活動を意義のあるものにするためには、指導者は児童が理解可能な英語で、ジェスチャーや視聴覚教材を使って、活動をやってみせることが一番なのである。学ぶことは真似ることから始まるのである。

(4) 指導者の英語

「児童でもわかる英語」の優れた例は、『英語ノート』の指導資料でLessonの1時限ごとに提示されている。この指導者の語りかけで使用されている英語のレベルは、中学校1年生で学習する程度のものであり、過去形や仮定法等は出てこない。使い慣れればかんたんな英語である。教員を目指す学生は必ず使えるようになるようになるべきである。

(5) 魅力的な導入

『英語ノート』にあるリスニングの活動やコミュニケーション活動、発表なども、それぞれの活動に入る前に、どれだけ魅力的に紹介するかによって生徒の学習に対する意欲はずいぶん違ってくる。事前活動が何もないまま、いきなり『英語ノート』の内容を示しても、児童の気持ちはそこにない。指導者の導入によることばがけひとつで、活動が生きることも体験した。

(6) 視聴覚教材の有効活用

必要に応じて、その日に扱う単元のイメージを想起させるようなBGMを使い、生徒の授業に対する期待感を高めることも重要な指導技術に数えられる。またICT教材を用いて視覚的に理解しやすい活動を提示することも、学習への意欲を高めるために非常に効果的である。

(7) 視覚教材の見せ方

使用言語が英語であることにより、視聴覚教材の充実が児童の理解を支援する。わかりやすい視覚教材とは、色やアウトラインがはっきりしたもので、小さくても一枚は八つ切画用紙を使用したい。また、その提示の仕方も、児童の興味関心を引くような見せ方を研究すると一層の動機付け効果が現れる。たとえば、一部分だけ見せておいて、‘What's this?’と聞いたり、上下逆にしておいて見せたり、早く見せて隠したり、シルエットで黒い輪郭を見せたり、というような工夫が活動を生き生きと活発なものにする。「百聞は一見にしかず」はここでも真である。

(8) 指導者の工夫

優れた活動、全員が参加して楽しかった活動は無意識のうちに引き込まれていくような指導者独自の工夫があった。『英語ノート』に示された基本的な活動を自分なりにアレンジして提示したものにはクラス全体が学びの楽しさを味わうことが出来た。このことから、指導者が書籍としての教材だけに頼らず、自らの創意工夫を付け足して提示すると魅力的な活動になることが証明された。そのためには教材研究は必須である。児童の日常生活と授業のねらいをどのように関連付けることができるかを事前に考えて創られた授業は魅力があったことを学生たちは体得できた。

(9) 活動の内容・工夫

『英語ノート』で取り上げられている活動内容は、リスニング、チャンツの他に、児童が学んだ英

語を使って自分のことを発表する 'Show and tell' や児童間でやりとりをする 'Interview game' など、最終的には「話して伝える」力をつけるように仕組みられている。

(10) 児童の理解度

授業運営の言語を英語にすると、児童の理解度を常に確認する必要がある。活動内容の提示を魅力的にし、児童を引き込み、理解できたかどうかをその表情から、反応から読み取る。そのためには机間巡視やアイコンタクトは必須であり、常に学習者に寄り添った活動である重要性を学生たちは体験的に学ぶことができた。

(11) 机間巡視

机間巡視を行うことで児童の理解度を確認することは重要なことであり、授業全体をスムーズに行わせる秘訣であるということ、児童の立場を体験した学生たちは理解した。授業を運営していく上においても、児童とのコミュニケーションが大切である。

どの活動を提示する場合でも、指導者なりの工夫が必要である。例えばリスニングは、単にCDを聞かせるだけでなく、そのリスニングの課題に含まれている単語や文章表現などを事前に提示する必要がある。それをしなければ無味乾燥な活動になるであろう。誰がどういう目的で聞かせようとしているのかを説明し、その内容が児童にとって身近な題材だと感じさせるような工夫が必須である。

チャンツは「音」と「絵」の組み合わせで内容を理解させることから始まる。まずCDを聞かせ、出てくる単語や扱っている文を視覚教材で示すことで意味がわかってくる。児童がリピートしやすいようにチャンツのリズムがそれを助ける。指導者の手拍子やリズム楽器なども効果的である。また、二人の会話になっているようなチャンツが多いので、クラスを2グループに分けてかけあいで練習するなど、指導者のステップ・バイ・ステップの指導技術が必要となる。

『英語ノート』の各Lessonの導入部で取り扱われる異文化理解については、目的をしっかりと捉えないとわかりにくい活動になることが模擬授業を通して明らかになった。内容の難易度 (+1/-49) について学生がネガティブなコメントを多く出したのは、異文化の知識を英語で問う活動に多く見受けられた。

例えば、「クイズ・ショー」というタイトルで学生が行った活動は、スウェーデンの小学校での英語学習の方法を三択で問うものであった。児童にとっては、このような情報は事前を知る余地もなく、また、使われた英語も程度が高く理解不可能なものであった。クイズ形式を用いているにもかかわらず、正答が単なる偶然によってしか得られない活動は、能力差が大きい児童間の差を不透明にするため意図的に利用される場合が多いが、ここでは児童役の学生たちの学習意欲を失わせてしまった。

ここで明らかにされたのは異文化理解を活動の中にどう位置づけるか、という問題である。コミュニケーション活動の素地を養う活動と、国際理解についての知識を習得したり考えたりする活動は、今まで「総合的学習の時間」としてひとくくりにして行われてきた。しかし、明らかに学ばせたいゴールが異なるため、『英語ノート』の中で扱われている程度の内容以上に掘り下げてしまうと、極端に難しくなる可能性を多く含んでいる。異文化理解教育は、児童の興味関心に応じて、彼らの知的好奇心を刺激するような題材を用いて行うべきであり、『英語ノート』に示されている活動とは一線を画して教えるのが適切である。

(12) 異文化理解の導入

『英語ノート』のほとんどのLessonの導入部分には多く国際理解教育の視点からの題材が取り入れられている。例えば、「Lesson 4 自己紹介をしよう」では、いろいろな国の児童の自己紹介を聞く活動から始まる。また、「Lesson 5 いろいろな国の衣裳を知ろう」ではいろいろな地域の民族衣裳を着た人々がホテルのロビーにいるという設定のリスニングから活動が始まっている。このように『英語ノート』には外国の文化に触れる機会が多く設定されている。このことから、異文化理解およ

び日本の文化についても理解しようとする内容になっていると学生たちは感じたようだった。

図6 授業風景



上記のことから、『英語ノート』を使った授業実践で学んで欲しい指導技術は、ただ「英語活動」のみに限定されるものではなく、すべての教科指導において重要なスキルであることを提示することができた。内容およびアプローチの仕方は『指導資料』に詳細に記載されているが、前述のような具体的な指導技術については触れられていない。そのことも、学校現場の現職教員が「外国語活動」に積極的に取り組めない要因になっているのかもしれないと、多くの現職教員からの聞き取りや学校現場の視察経験から筆者は感じている。「外国語活動」の指導方法はひとつではないが、児童にとってわかりやすい指導方法とはどのようなものなのか、その一例を示す道標となるべき授業実践が教員養成学部では行われるべきである。

8.4. 第4の目的の結果と考察

第4の目的は「チーム・ティーチングの形態を経験することで担任の役割と外国人指導助手または外国語を話す者の役割や課題を体感することであった。

今回の「小学校国際理解・英語活動」の実践では、前掲の「図5 授業形態（チーム内の個人の役割分担）」に示したように、人数と授業時間数の関係で全員が担任役をすることができなかった。英語をある程度話せる学生がALTの役割を2時限分担当し、担任役の学生とのチーム・ティーチングの形態を経験した。

学期開始当初は、学生相互の間で担任の役割とALTの役割が明らかにされにくく、模擬授業を行っていてもそれぞれの役割分担が不明瞭だったが、授業回数が進むにつれて担当が次第に明らかになっていった。それは、実践の回数を重ね、何度も他の学生の模擬授業を観察していくうちに、学生たちの中ではっきりと、英語を話して活動を中心となってひっぱっていくALTとそのサポートをしながら主に児童に寄り添って、児童の理解度を確認したり、児童の代表になる担任の役割の違いが明確に認識されていったからであろう。

さらに、ALTと担任とのかけあいの導入の部分では、ALTと担任がそのときどきの時点で興味関心を持っている話題や、生徒の実生活に密着した話題などを取り上げ、それをウォーミング・アップとして、その日に予定された活動に入っていくような、工夫された授業展開が自然にできるようになっていったのは特筆すべきことである。

8.5. 第5の目的の結果と考察

第5の目的は「実際の指導に必要な英語力を知り、教員採用試験に向けて準備をする」であった。

「8.3.2. 模擬授業後の指導技術調査」の「(2) 活動の導入・提示方法」の中で「指示言語について」「英語でよかった (+88/-0)」、 「英語運用能力が脆弱 (+10/-71)」という結果が出ている。英語活動を行うにあたって、授業中の指示言語として英語を使わず、もっぱら日本語で指示しながら英語活動を行ったほうが良いという意見があり、「小学校国際理解・英語活動」の模擬授業においても、指示を日本語で出しながら実践した学生が少なからずいた。

そういった学生の実践については、上記のように「英語で指示を出したほうがよかった」という意見が多く出された。日本語を使った理由を担当学生に聞く機会を正式には設けなかったが、学生自身の英語力の弱さに比例して、英語の使用頻度は少なくなったようであった。

また、いわゆる「教室で使うクラスルーム・イングリッシュ」は児童に指示を出す英語であり、中学校1年程度の英文法しか含んでいない。だが、授業者の英語運用能力が弱いとコメントを出した学生の数が非常に多い。教育学部に在学している大学生であっても、簡単な指示の英語が使えない現状を、学生自らを変えていく必要が大いにあると思われる。

前述したように、2010年度教員採用試験から岐阜県教育委員会が、ALTとの打ち合わせを英語で行う第2次面接を課したことは特筆すべき事項である。岐阜県教育委員会としては、学校現場で英語を用いた打ち合わせや、外国語活動における英語指導能力を新採用教員に求めているものと判断できる。

今回この「小学校国際理解・英語活動」の授業で『英語ノート』を使って模擬授業を体験した学生は、外国語活動においてどのレベルの英語力が必要であるのかを理解できたので、教員採用試験に向けて基礎的な英語力を強化するとともに、クラスルーム・イングリッシュも真剣に声に出して練習する必要がある。

8.6. 「小学校国際理解・英語活動」の受講者

今回は受講者が29名だったこともあり、少なくともひとり1回ずつの模擬授業を担当する時間を確保できたことは幸いであった。近い将来教育現場に立つ学生たちは、コミュニケーション・ツールとしての英語を学んできた世代として、教育現場で即戦力として大きく期待されている。その期待に少しでも応えるためには、実際に授業をする立場に立ち、真剣に授業者として準備をし、計画を練り、実施し、振り返りをする、いわゆる 'plan-do-see' の一連の授業実践の体験と研究が必要である。そういった経験を通して始めて指導者としての英語活動の指導技術や指導方法の実際がわかってくる。

今年度の「小学校国際理解・英語活動」第1回目授業のオリエンテーションには専攻分野が異なる51名の参加者があり、その際に行った学生アンケートの「受講理由」から、英語活動に関して教職希望者としての興味や不安などがあることが読み取れる。なお、正規履修者数は上述の通り29名となったため、オリエンテーション参加者の約4割が受講を断念したことになるが、その理由は不明であるものの、実際に英語を用いて模擬授業をするということへの抵抗感があつたのかもしれない。

図7 オリエンテーション出席者の所属講座別比率

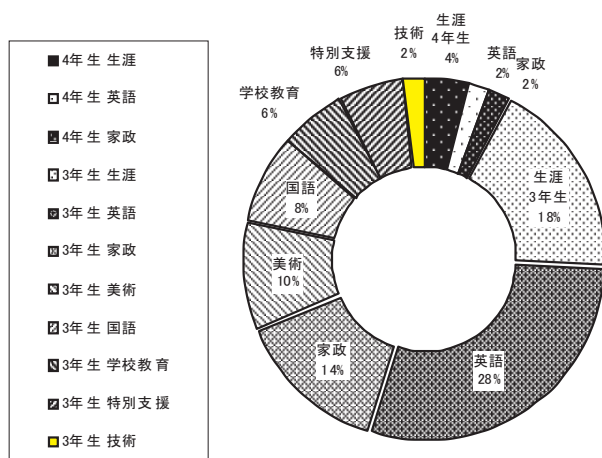
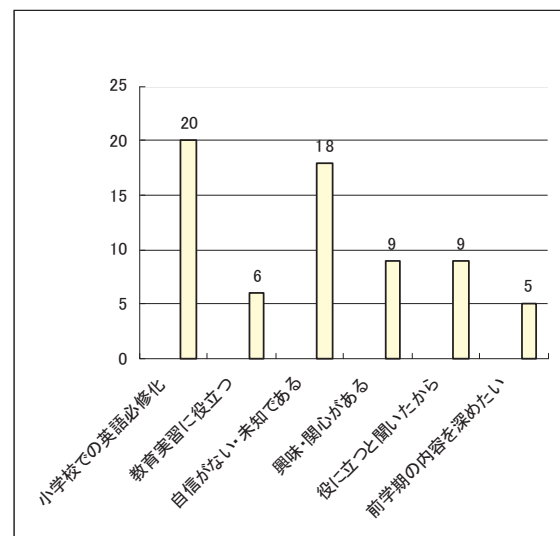


図8 オリエンテーション出席者の受講理由



9. まとめと今後の課題

9.1. 岐阜大学教育学部の小学校英語への対応

小学校の外国語活動において誰が何をどう教えるべきかという議論は、『英語ノート』が全国の小学校に配布されたことにより、ひととおりの結論を得た。外国語活動のための現職教員研修は年々盛んになってきているが、多くの現職教員の中にある外国語に対する一般的な苦手意識や、これまで「活動」として使うための英語を習得してこなかったという事実が、教員にとってこの新しい授業を担当する際の心理的に大きな厚い壁になっている。

岐阜大学教育学部では、本稿冒頭で紹介したように、現時点で小学校外国語活動に対応した授業科目は2年次後学期開講の「児童英語教育」と3年次前学期開講の「小学校国際理解・英語活動」の2科目が開講されている。しかし、これらの授業科目は学校教員養成課程生涯教育講座ならびに生涯教育課程の専門科目であるため、他講座所属の学生の受講が少ない。2011年度から始まる小学校外国語

活動の本格実施に向けて、大学において小学校英語にどのように対応し、学生をどのように指導していくのか学部内で議論が始まっているが、多くの学生が小学校教員として就職している現状からも、早急に対策が求められるところである。

9.2. 求められる指導力とは

この模擬授業を中心に構成した「小学校国際理解・英語活動」における今年度の実践をまとめてみて明らかになったのは、「小学校の外国語活動で求められる教員の指導力とは何か」ということが、これまで明確化されてこなかったということである。文部科学省は、2011年度から公立小学校に外国語活動を導入することを決定した後、指導内容の解説書である『指導資料』、副教材『英語ノート』、ICT教材、音声教材（CD）、視覚教材を作成した。現職教員研修も確かに盛んになってきているが、その内容は果たしてすべての公立小学校において2011年度から英語活動を本格的に開始するために必要十分なものとなっているのだろうか。筆者（平松）が関わる教員研修の多くは、未だに「いかに教員自身の英語に対するアレルギーを失くすか」というレベルであるのが現実である。

英語を使って指導するということは、指導者自身が多少でも自信を持って英語を操る運用能力と、授業内容を児童に魅力的に導入するプレゼンテーション能力が必要である。『英語ノート』に取り上げられている題材は、アプローチの仕方次第で魅力的になる。それをどう提示していくのか、どう生徒たちを活動に引き込んでいくのか、という外国語活動にとって要のノウハウを小学校教員志望者に指導できるような授業が教員養成学部の中で必須だと思われる。

教育学部を卒業して小学校で教鞭をとることになる学生たちは、学校現場にとっては新しい取り組みとなる外国語活動の強い牽引力になることを赴任先から期待されているであろう。そのときかれらが自信を持って取り組むことができるような教員養成が喫緊の課題として求められている。

参考文献

- 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領, 東洋館出版社
- 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説 外国語活動編, 東洋館出版社
- 文部科学省 (2009), 英語ノート 1
- 文部科学省 (2009), 英語ノート 1 指導資料